

[シリーズ]

PISA型読解力 について考える

第3回



北川朋子先生

和歌山県立田辺高等学校

第3回は、和歌山県立田辺高等学校・北川朋子先生の国語科の実践例をレポートする。先生は、通常の授業に部分的にPISA型の発問や考え方を取り入れ、さらにPISA型読解力を付けるための授業実践を通じて、生徒の受け身の授業態度から能動的な授業参加の態度への転換を図り、PISA型読解力の育成を促そうとしている。

- 現代文の授業で行き詰まりを感じたのが
- PISA型読解力向上授業導入のきっかけ

和歌山県立田辺高等学校の北川朋子先生がPISA型読解力を知ったのは、2006年、和歌山県が主催する県内の小学校・中学校・高等学校の教師を対象とした「国語力向上推進教員養成事業」への参加がきっかけだ。研修の講師は、本誌4・5月号で紹介した国立教育政策研究所統括研究官の有元秀文先生だった。

高校の教壇に立って6年目を迎えていた当時は振り返って北川先生は、「教師になりたてのころは無我夢中でしたが、当時は授業にも一通り慣れた反面、現代文の授業で行き詰まりを感じるようになっていました」と語る。「古文・漢文では教師と生徒の間に圧倒的な知識の差があるため、教えることはたくさんあります。ところが現代文は、高校生になれば読めば内容は理解できますので、それにプラスして『今日の授業ではこういう力が付いた』と生徒が実感できるような授業ができていないのではないかな。そのためには何を教えればよいのかと悩んでいたのです」

そんなとき研修に参加し、「PISA型読解力」に出会った。

「PISA型読解力は、本文をもとに根拠を挙げて、自分の意見を述べる力を育成・向上しようとするものです。私はそこに強く惹かれ、また、大学受験に対応する力も付くのではないかと感じました」

PISA型授業について、北川先生が従来の現代文の授業と最も大きく違うと感じたのは、従来の授業では作品を精読して正しく理解することが主眼であったのに対し、PISA型読解力では、作品を理解した上で批判的（クリティカル）に考察し、自分の考えを述べるという点であった。

「これまでも、授業の最後に感想を述べさせてはいましたが、それはいわば『おまけ』でした。私も生徒の感想に対し、『なるほどそう感じたのね』『みんなそれぞれの感想があって面白いね』といったコメントで終わらせていました。以前の授業では『どうして太郎は泣いたと思うか』という問いに対して『悲しかったから』という答えでよかったのですが、PISA型読解力の授業では『どうして悲しかったのか。その根拠は、どこに書いてあるのか』と、教科書の中で根拠になる箇所を挙げさせることを最も重視します。これまで授業の最後に述べさせていた感想のための発問が、授業の主役となるのです。さらに、生徒の感想に対

【資料1】「なめとこ山の熊」の指導計画（全7時間）

- 【第1時】「なめとこ山の熊」の全文を通読し、初発の感想を書く。
第1段落の情景を絵に表すことで、物語の舞台と登場人物像を把握する。
- 【第2時】第1段落の読みとり。小十郎と熊の関係を表現に即して理解する。
- 【第3時】第2段落の読みとり。小十郎と荒物屋の主人のやりとりを通して、小十郎のおかれた状況を理解する。
- 【第4時】第3、4段落の読みとり。「2年後に死ぬと約束した熊」をめぐる小十郎の心理を理解する。
- 【第5時】第5段落の読みとり。
熊にやられて死んだ小十郎の「死に顔」について話し合い、理解を深める。
- 【第6時】「ウサギに『生存権』はあるか」を読み、「なめとこ山の熊」との類似点・相似点を指摘する。
- 【第7時】2つの文章を比較して考えたことを400字の意見文にまとめる。

して『なぜか、その根拠は』と聞き返すことができるということ、また、そうしなければならないということが、大きな発見でした」

北川先生は、PISA型読解力向上の手法に出会ったときの衝撃をこう語る。

● 多様な解釈が可能な小説を活用 ● 副読本、調べ学習なども授業に導入

北川先生がPISA型読解力向上授業でこれまでに取り上げてきたのは、基本的に同校で使っている教科書に載っている文章である。具体的には、1年生で宮沢賢治の『なめとこ山の熊』【資料1・2】、2年生で中島敦の『山月記』と夏目漱石の『こころ』、3年生で安部公房の『赤い繭』、川上弘美の『離さない』（他の教科書に掲載）、森鷗外の『舞姫』、アインシュタインがフロイトに宛てて書いた『アインシュタインの手紙』である。『アインシュタインの手紙』以外は小説である。それは小説の方が多様な解釈が可能のため、ディスカッションに慣れていない生徒でも、議論を楽しめると考えたからだ。

授業は、「まずは、研修で学んだ通り行っている」と言い、

- ① 全文を理解しなければ答えられない発問をし、読解に必要な情報を取り出させる（情報の取り出し）
- ② 全文を理解した上で、筆者の意図や登場人物の思考や行動について推論し、本文に書いてあることを根拠にして自分の意見として表現させる（解釈）
- ③ その上で、自分の考えや体験と結び付け、文章や登場人物を評価、批判し、本文に書いてあることを根拠にして自分の意見として表現させる（熟考・評価）

という流れで行う。

また、①の情報の取り出しに当たっては、ワークシートを用意し、時間を区切って、全員が必ず何か書くように促している。②の解釈や③の熟考・評価では、ワークシートに各自記入させた上で、6～7名のグループを作って20分ほど意見交換をし、本文を根拠にした説得力のある意見1つに集約させた後、グループごとに板書して発表。最後に北川先生が、根拠の曖昧な点を指摘したり、しっかりした根拠に基づいた意見を褒めたりして、まとめとする。

北川先生は議論を促す工夫として、絵や副教材の活用、調べ学習を導入した。例えば『なめとこ山の熊』は、動物と人間の共生、生きるために他の生き物の命を奪わなければならない人間の哀しみを描いた作品だが、物語の舞台と登場人物像を理解させるために、初回の授業で第1段落の情景を絵に描かせた。また、西研の評論「ウサギに『生存

【資料2】「なめとこ山の熊」5時間目の展開

時間	学習活動・内容	指導者の活動
導入 10分	<ul style="list-style-type: none"> ・指導者の朗読を聞き、 ①白沢の情景 ②小十郎が最後に見たもの ③三日後の晩の出来事 についてそれぞれメモする。 【情報の取り出し】 ・メモをもとに発表し、情報を共有するとともに、本時の内容をつかむ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートを配布し、本時の学習内容を簡単に説明する。 ・第5段落を朗読し、ワークシートに記入させる。 ・聞き取ったことを発表させ、クラスで共有化をはかる。 ・「黒い大きなもの」＝「熊」ということをおさえる。
展開① 25分	<ul style="list-style-type: none"> ・小十郎の「死に顔」について考え、グループで話し合う。 【解釈】 ・グループでの意見を1つにまとめ、黒板を使って発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシート④の課題に取り組むよう指示する。(最初5分→個人活動、10分→グループ活動) ・10分間のグループ活動において意見を1つにまとめることを指示し、代表者に黒板に書かせる。 ・黒板に書かれた意見について1つずつ読み上げさせ、補足があれば尋ねる。
展開② 10分	<ul style="list-style-type: none"> ・物語の結末について自分の考えを持つ。 【熟考・評価】 ・話し合いの中で、自分の考えを明確にしていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシート⑤の課題について、グループで話し合わせる。
まとめ 5分	<ul style="list-style-type: none"> ・課題⑤の完成に向けて、話し合いの中で得た考えをメモにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・次回までに課題⑤を仕上げてくることを指示する。

権』はあるか」を併読させて、登場人物の心に寄り添い鑑賞するだけでなく、生徒に批判的な思考を促す助けとした。『アインシュタインの手紙』では、現在の世界情勢について事前に調べ学習を行い、はっきりとした事実・根拠をもとにグループ活動を行った。また、調べる活動を通して多くの資料を収集し、その中から適切かつ効果的な情報を選択する「活用する力」の育成も目指した。

● グループ活動では ● 生徒同士の関係に細かく配慮

グループで話し合う際の人数は6～7人。討論しやすいのは4名程度だが、グループ討論の後、代表者が各グルー



【資料3】「アインシュタインの手紙」のワークシート2

☆「アインシュタインの手紙」ワークシート2 ☆

調べて、考えよう

現在、世界で起こっているさまざまな紛争について調べ、アインシュタインの考えを平和の実現方法が効果的かどうか、考えてみよう。

→ 調べたいところ

「イラク問題における国連のはたらきについて」

★イラクの大量破壊兵器問題
無条件、無期限の査察を求める国連決議
→ イラクが受け入れ

査察の継続が必要

←

アメリカが武力で武器解除しようとする

フランス・ロシア・ドイツ・中国らの強い反対
国連も支持せず（安全保障で賛成少数で否決の見込み）

【しか】

イラク戦争開戦

国連アナン事務総長：強い遺憾の意

国連の総会での決議→強制力・拘束力をもたない
国連安全保障→国連の中で最も大きな権限
(法的に国連加盟国を拘束する権限)
平和・安全維持に対し大きな責任

イラク戦争では米英以外の大半の国は反対
だが実際には開戦

○、アインシュタインの考えた国際的平和の実現方法は良い方法だと思いませんか
良いと思う場合は、その理由を、他に良い方法があると思う場合はその方法を書いてください。

自分の考え

アインシュタインの考えに () 賛成 () 反対

理由

アインシュタインの考えは間違っていないが、今の国連はアメリカなどの常任理事国に牛耳られているような感じがあるので、アインシュタインが言っているみたいに5カ国の常任理事国にも拒否権などのすべての権利を放棄させるべきだと思う。現在の国連では、5カ国の利害が優先されているように見えるからだ。

【理由】

平和維持団体の中で、主導権を持つ国は必ず現れる。その国は、自国の利益を求めがちになる。現実的にそのような現象が起こっている。広報戦略によって国民の目を洗脳することもある。他の国に利益がいくようにするには、常任理事国の権限を弱くするべき。実際、戦争などの世の中の動きがなくなるとお金の動かないという現実もあるため、平和維持団体を削ったとしても、平和を乱すもとを根本的に断つことは難しいのではないかと。

*他の方法
平和維持団体をつくるならば、政府の中から代表を出すのは避け、別に国民投票などで代表者を決める。政治家のなかから選ぶと、その国の意見というより政府の意見という色合いが強くなると思うから。理論だが、世界の国全てが参加し、対等な立場での議論ができるような機関をつくるべきである。

プの意見を板書するには、スペースの都合上、1度に6～7グループが限度である。逆に7人以上のグループにすると、グループ内で話が2つに分かれたり、話し合いに参加しなくても時間を過ごせたりする生徒が出てしまう。

また、グループ内で誰がリーダーとなるかは、討論がうまくいくかどうかのポイントの1つだが、生徒同士に任せるとはせず、その都度「誕生日が一番早い人」「ファーストネームが五十音順で一番早い人」などと指定。時には北川先生が指名することもあったそうだ。「私自身、高校生のころ『さあ、グループで話し合っ』と言われると嫌でした。生徒には生徒同士の人間関係があるので、リーダー役になり『でしゃばっている』と思われたくないからと、発言できずにいることがよくあります。そこで、本当は意見があるのに言えずにいる生徒をリーダー役に選ぶこともあります」

- PISA型読解力向上授業以外でも
- クリティカル・リーディングを促す

北川先生はこうしたPISA型読解力向上授業を、2年生と3年生は、各学期2回を目安に現代文や国語総合の授業

で行う予定だ。「各学期2回」というのは、学年全体の年間計画に応じた進度を確保する必要があることと、従来の精読主義の授業で培う力も大切であるとの考えからだ。また、入学したての1年生は生徒同士や教師との人間関係ができていないため活発な討論は難しい。また、まずはきちんとした授業規律を身に付けることが大切である。そこで1学期はPISA型読解力の授業は行わず、2学期から行う予定だ。

とはいえ北川先生は、ワークシートへの記入や討論、グループの発表の時間を十分取って行う「PISA型読解力向上」と特に位置付けない通常の授業の中でも、批判的に思考し、表現する力を養う工夫を行っている。

「例えば通常の授業でも、問いに対して本文のどこを根拠に答えを導き出したかを聞いたり、まとめでは、作品を評価するような発問をしたりしています。また、問いに対して一人に答えさせるのではなく、全員にノートに書かせ、答えを前後の生徒同士で見せあって2～3分話し合わせることもあります。これまで生徒は『どうせ後で先生が答えを言うからそれをノートに書けばいい』と、受け身の姿勢でしたが、人に見せるなら何か書かなければと思うようで、全員が頭を働かせるようになりました」

生徒からは「眠くならないし、いろいろ面白い意見が出てくるので楽しい。グループ活動の方が通常の授業より集中できる」「グループで互いに意見を出しあうという進め方は、とても良いと思う。他の人の考え方や、自分が思いつかないような意見を出してくれるので、学習意欲がわいてくる。またやりたい」といった感想が寄せられ、おおむね好評だ。「他のグループが感心するような意見を出したいという競争心もあるようです」（北川先生）

しかし中には、「他のクラスはやっていないのに、自分たちだけのんびり話し合いをされていていいのだろうか」「授業の進度が心配」「最後に正解が与えられないのが不安」という声もある。「『根拠をもとに考える練習だよ』とは言っているのですが、受験のことを考えると生徒が不安に思う気持ちも分かります。ただ、自分の意見を持ち、討論の中から問題を解決していく力は今後絶対に必要な力です。この力は家庭での勉強では身に付きませんから、学校で取り組む必要があると思っています」（北川先生）

● 教師自身も批判的な思考を ● 身に付けることが今後の課題

教える側の課題としては、まず、「発問の難しさ」を北川先生は挙げる。PISA型読解力では、解釈では「教材全体を読んで答えるような問い」、熟考・評価では「あなたならどうしますか」「この終わり方に賛成ですか。反対ですか」というのが代表的な問いである。北川先生も、この基本に則って問いを作っているが、「それでもまだ、日本的で曖昧な問いになってしまう」のだと言う。例えば『アインシュタインの手紙』を取り上げた際、北川先生は最後に「アインシュタインの考えに賛成ですか、反対ですか」という問いを立てた。そして授業の前に有元先生に添削を依頼したところ、「これよりも『アインシュタインは、国際的な平和が訪れるためにはどうしたらいいと言っていますか。その方法はいい方法ですか。いい方法ではありませんか』という問いに代えたほうがいい」とのアドバイスが返ってきた。つまり、いきなり賛成か反対かを考えるのは難しいため、問いを通して考える手順を生徒に示し、答え方の範囲を狭めることで、生徒は具体的に考えやすいというわけだ。

そしてもう1つ、北川先生が自分の課題と感じているのが「生徒に板書させてグループの意見を発表させた後の教師のまとめ」だと言う。「根拠がしっかりしているかどうかを押さえ、それをもとに評価をしているのですが、生徒は『先生は最後に一番いい意見を選んでくれる』と思って

おり、それがないと『結局正しいのはどれか』と宙ぶらりんで授業が終わってしまうと感じるようです。本来、異なる意見が出たら、どの点が異なるかをはっきりさせて、最後にどの意見が最も説得力があるか生徒自身が理解するところまでもっていかなければならないのですが、そのためには私自身が、生徒たちの意見をその場で分析し、説得力のある解説をする力を高めていかなければならないと思っています」

また北川先生は、「授業では生徒にクリティカル・シンキングを促しているものの、自分自身、日頃からクリティカルに物事を考え、常に自分の意見を持つようにしているかと、省みています」と語る。「例えば国語力向上推進教員養成研修において、教師同士でグループワークを行った際、私も含め、お互いの意見を褒めあうことが多く、クリティカル・シンキングに基づいたつっこんだ議論は十分出来ていなかったと感じました。まずは自分の思考をクリティカル・シンキングに変えていくことが、生徒のそれを育むためには大切だと感じています」

現在、北川先生は当初の「現代文で生徒に何を教えればよいのか」という悩みからは開放され、「この問いを、生徒は面白がるだろうな」と、わくわくした気持ちで教室に向かうことができるようになった。また、ワークシートが白紙のままの生徒は徐々に少なくなり、教材の読み方も深くなるなど「生徒に根拠をもとに自分の意見を考え、表現する力が付いてきている」という実感が得られるようになり、PISA型読解力向上の大切さを再認識しているところだと言う。

和歌山県立田辺高等学校

◇所在地：〒646-0024 和歌山県田辺市学園1-71

◇創立：1948年4月（昭和23年）

学制改革により、県立田辺中学校、県立田辺高等女学校、県立田辺商業高校、私立田辺高等家政女学校の4校を統合して創立。

◇学級編成：各学年8クラス（普通科6クラス、自然科学科2クラス）
総生徒数960名（2008年現在）

◇特色

1948年に4校を統合して創立された、歴史と伝統に育まれた高等学校。南紀を代表する進学校であり、全国の国公立大、関東圏・関西圏を中心とする私立大に多くの卒業生を送り出している。1994年には自然科学科を設置。2006年には県立田辺中学校が開校し、併設型中高一貫校となった。教育目標は「合理的な思考」「積極的な行動」「豊かな情操」。アメリカ・サクラメント市のミラロマ高校と姉妹校提携を結ぶなど、国際理解教育にも熱心である。

◇卒業生の進路：（2008年3月卒業）

〔普通科〕

卒業生272名（国公立大34名 私立大123名

短期大学・専修学校等74名 就職ほか41名）

〔自然科学科〕

卒業生79名（国公立大43名 私立大19名

短期大学・専修学校等2名 就職ほか15名）